

笠原小学校の英語教育の歩み（3）

第3期（2009年度～2011年度）の研究から
—笠原型コンテンツ・ベイストの定義の確立—

The History of English Education of Kasahara Elementary School from 2009 to 2011 .
—Making a Clear Definition of the CBAE Model—

瀧 沢 広 人

Hiroto TAKIZAWA

1 はじめに

笠原小学校は、第1期（2003～2005年度）、第2期（2006～2008年度）と文部科学省指定研究開発学校として研究に取り組み、コンテンツ・ベイストの手法による授業を組み立てた。第2期の2年次（2007年度）には、笠原小学校の英語教育の取組を「笠原型コンテンツ・ベイスト」と名付け、教育実践に一定の型を示している（瀧沢, 2020a, 2020b）。

笠原小学校が英語教育の研究に取り組み始めた2003年は、学習指導要領の改訂（2002）による「総合的な学習の時間の新設」や、文部科学省（2002）の「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」、さらに翌年の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画（文部科学省, 2003）」と、現在に至るまでの英語教育の在り方に影響を与えてきた発表や提言がなされた時期と重なる。学習指導要領については、「総合的な学習の時間」の中で、国際理解領域において英語活動が可能となり、また戦略構想及び行動計画では、「日本人に求められる英語力の目安」や「英語の授業改善」「英語教員の指導力向上」「海外留学等の英語学習へのモティベーションの向上」「大学入試改善」等の指針が示された。「日本人に求められる英語力」としては、中学卒業時に「挨拶や応対、身近な暮らしにかかわる話題などについて平易なコミュニケーションができる」とし、卒業者の平均が英検3級程度のコミュニケーション能力を備えていることを目標にした。また、高等学校卒業段階では、「日常的な話題について通常のコミュニケーションができる」とし、高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度となるよう目標が示された。さらに、指導者である英語教員については、「概ね全ての英語教員が、英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る授業を行うことのできる英語力」とし、英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点程度以上を目標に掲げている。その結果は、文部科学省（2020a）の「令和元年度『英語教育実施状況調査』の結果と今後の取組について」において、中学校も高等学校も「生徒の英語力指標は着実に上昇」と報告している。実際、2011（平成23）年には、CEFRでA1レベル相当以上が中学3年生全体の25.5%であったのに対して、2018（平成30）年には42.6%、2019（令和元）年では44.0%と向上が見られ、高等学校においても、CEFR A2レベル相当以上が、2011（平成23）年は30.4%、2018（平成30）年は40.2%、2019（令和元）年には43.6%と、着実な向上が見られている。

総合的な学習の時間における英語活動については、「『英語が使える日本人の育成』のための行動計画」（文部科学省, 2003）において、次のように触れられている。

「総合的な学習の時間」における英会話活動においては、単なる中学校の英語教育の前倒しは避けるとともに、教員が一方的に教え込むのではなく、児童が楽しみながら外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育成することが重要である。こ

のため、下記のような施策を通じて、こうした取組の円滑な実施を推進する（同：11）。

ここからも分かる通り、日本の小学校英語は、中学校とはまた別の切り口の教材開発や指導法を必要とし、研究を求めていることがわかる。また、その後に続く「施策」の中に、「指導方法の改善」とし、「研究開発学校制度の推進」の項目があり、そこにおいては、「研究開発学校制度の下で、引き続き、小学校英語教育に関する指導方法などを開発する（同：11）。」とあり、笠原小学校における研究の位置づけや役割の根拠となっている。

以上のような位置づけで研究開発に取り組んだ笠原小学校の研究指定は、以下である。

第3期：平成21年度 文部科学省指定英語教育改善のための調査研究学校
平成22～23年度 文部科学省指定研究開発学校

本稿では、笠原小学校（2012）の「文科省発表原稿」及び、笠原小学校（2011）の「外国語活動 指導計画集」を基に、笠原小学校における英語教育を整理する。

2 笠原小学校 第1期・第2期の研究について

第3期の研究について整理する前に、第1期と第2期で、どのような研究が行われてきたのか、第1期と第2期の研究を比較しながら整理したい。

2.1 「研究テーマ」からの比較

第1期と第2期の研究テーマを比較すると次のようになる（表1）。

表1 研究テーマからの比較（下線協調は筆者）

第1期（2003～2005年度）	第2期（2006～2008年度）
(研究主題) 英語に慣れ親しみ、進んで <u>使おう</u> とする子の育成～CBAEの手法を取り入れて～	2006年度 英語に慣れ親しみ、進んで <u>つかおう</u> とする <u>子</u> の育成～コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～ 2006年度 英語に慣れ親しみ、進んで <u>コミュニケーションを図ろう</u> とする <u>子</u> の育成～ <u>笠原型</u> コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～ 2007年度 英語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする <u>児童</u> の育成～ <u>笠原型</u> コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて～

第1期の研究テーマは、「英語に慣れ親しみ、進んで使おうとする子の育成～CBAEの手法を取り入れて～」であった。

第2期では、第1期の研究テーマを踏襲しつつも、「使おう」が、第2期では平仮名で「つかおう」となったり、同じ第2期の中でも1年次の「子の育成」が、2年次には「児童の育成」に変わったりしている。中でも、一番の大きな変化は、「笠原型コンテンツ・ベイストの手法を取り入れて」と「笠原型」と名付けていることであろう。その背景には、それまでの研究に取り組みが定着し、笠原小学校における英語教育の型ができたことの現れ、が副題となって表現されていることと思われる。

2.2 「小学校卒業時に目指す児童像」からの比較

第1期は、「相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを進んで話そうとする」「英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具体物などを使って自分の意思を相手に伝える」「相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する」の3つが設定されていた。

第2期では3つの項目が削除され、文末が「～な子」となっている（表2）。

表2 小学校卒業時に目指す児童像（下線協調は筆者）

第1期（2003~2005年度）	第2期（2006~2008年度）
〔関心・意欲・態度〕 相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを進んで話そうとする。	〔関心・意欲・態度〕 相手の話を積極的に聞こうとし、自分の思いを進んで話そうとする <u>子</u>
〔聞く・話す〕 英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具体物などを使って自分の意思を相手に伝える。	〔聞く・話す〕 英語を聞いて相手の意思を理解すると共に、英語や身振り、具体物などを使って自分の意思を相手に伝える <u>ことができる子</u> 。
〔コミュニケーション〕 相手や場に応じて柔軟に対応し、話題を広げて楽しく英語で会話する。	削除

2.3 「指導体制」からの比較

指導体制については、次の3つがあり、第1期と第2期では変わっていない。

- ①E学習（英語活動の授業としての時間）
- ②E学習（朝の会等における英語に慣れ親しみ、進んで英語を使おうとすることを目指した時間）
- ③E体験（外国人を学校に招いたり、放送委員会による英語による校内放送を行ったりするなど英語を用いた環境を整備し、体験活動を行う時間）

2.4 「年間指導計画」から比較

第1期では、コンテンツ・ペイストの手法による授業づくりまた教材開発に工夫を入れ、A4版1枚の単元の指導計画が作られた。

第2期では、その1枚の単元計画に記された指導課程をさらに詳細に記述した1時間1時間の授業の細案が作成されている。

2.5 「1時間における指導課程」からの比較

第1期は、「Practice Time」から「Activities Time」と指導手順となっている。

第2期では、Greetings, Song Timeの後、いきなり「Activities Time」となっている。このことについて、研究開発実施報告書において、次のように記している。

1単位時間の授業を3つのステップにすることで児童の英語活動の中心である“Activities Time”が大きな一連の流れになり、児童が自ら活動を理解し、より意欲的に活動できるようになった（笠原小学校, 2009: 30）。

ここが大きな変化である。

第1期の Greeting, Song Time→Practice Time→Activities Time→Comments Time という4段階の指導過程が、第2期では、Greeting, Song Time→Activities Time→Comments Time と3段階にな

り、Practice Time が削除されている。このことから、あくまでも言語材料は、言語活動の中で指導する姿勢が感じられる。報告書の中でも「場に応じて、(時には動作や具体物を通して)繰り返し聞かせることで、だんだんと英語が自然な形で話せるようになった(同:30)」とあることから、言語活動を通じ、学習内容を指導していったことが分かる。2020年度完全実施の「小学校学習指導要領(平成29年告示)外国語活動 外国語編」に幾度となく出てくる「言語活動を通じて」が、この時期(2003~2009年)の研究において、すでに実行されていたことになる。

2.6 「成果と課題」からの比較

第1期の成果では、「英語に興味関心をもち、英語を身近に感じる児童が多くなった」「積極的に英語を使っていこうとするまでには至っていないが、挨拶などの慣れ親しんだ英語の表現を使う姿が多くなってきた」「CBAE 学習は、児童の知的欲求を満たすことができるような学習過程が仕組みやすくなるため、特に高学年において有効に働くことがわかった」と研究の成果を挙げている。

第2期では、「笠原型コンテンツ・ベイスト」を大切にした英語活動の細案による年間指導計画全ての指導案をデジタル保存し、実践しながら細部に手直しや入れ替えをして改善を図ることができた」とあるように、年間指導計画(単元指導計画)においても第1期と2期では大きく研究が進んでいることがわかる。

3 本研究の目的及び方法

本研究の目的は、笠原小学校の第3期の研究を整理することである。第3期の資料は、笠原小学校(2012)の「文科省発表原稿」及び、「外国語活動 指導計画集」である。第1期、第2期では、十分に触れられなかった年間指導計画や授業の中身を書き残し、笠原型コンテンツ・ベイスト授業の内容に迫ってみる。

4 笠原小学校 第3期の研究(2009年度~2011年度)

4.1 研究テーマ

第3期では、「小学校における英語教育の在り方及び、小学校から中学校への円滑な移行に関する研究」の調査事項を受け、研究テーマを「生き生きとコミュニケーションを図る児童を育てる指導の工夫～笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いて～」としている。第2期の「英語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」からの変更である。「進んで」から「生き生きと」に変わり、「児童の育成」から「指導の工夫」となっている(表3:下線強調は筆者)。

表3 研究テーマの比較

第2期	英語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする <u>児童の育成</u> ～笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いて～
第3期	生き生きとコミュニケーションを図る児童を育てる <u>指導の工夫</u> ～笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いて～

4.2 「英語」の年間授業時数

第2期では、低学年35時間、中学年70時間、高学年70時間の合計350時間であった。

第3期では、中学年が10時間減少し、低学年35時間、中学年60時間、高学年70時間の合計330時間の英語授業時数となっている。第3期の教育課程では、中学年においては総合的な学習の時間の70時間のうち60時間を英語活動に当て、10時間を総合的な学習の時間にしている。

4.3 笠原型コンテンツ・ベイストの定義

4.3.1 第2期 笠原型コンテンツ・ベイストにおける3つの「条件」

第2期の「研究開発実施報告書 第1年次」（2006年度）には、「私たちは昨年度より、以下のような英語活動の内容の条件を意識して英語活動を仕組んできた」と記し、次の3つの条件を示している。

＜コンテンツ・ベイストの授業の条件＞

- すべての児童にとって共通の内容（話題）である。
- 多くの児童がその内容（話題）に興味を持っているか、持つ可能性が高い。
- その内容（話題）を取り上げることで、楽しい英語活動を成立させることができる。

ここに「昨年度から」とあるように、笠原型のコンテンツ・ベイストは、第1期の第3年次から、その原型ができつつあることがわかる。

第2期の1年次（2006年）の報告書で、次の3点を確認している。

- ①児童が興味を持つ題材であったか。
- ②問題解決的な英語活動であったか。
- ③言語材料（英語表現）は、必然性のある場面で使われたか。 （同：22）

第2期の段階では、「笠原型コンテンツ・ベイスト」と「笠原型」がついているものの、その明確な定義は記述されておらず、授業を成立させる「条件」が示されているのみであった。

4.3.2 第3期 笠原型コンテンツ・ベイストの4つの「要件」

第3期に入って、笠原小学校（2012）は、笠原型コンテンツ・ベイストについて次のように説明している（太字・下線強調は筆者）。

私たちは、単なるゲームやスキルを中心として授業ではなく、児童にとって驚きや発見を生む内容、教科等の学習内容と関連付けた内容、「聞く・話す必然」のある問題解決的な活動、3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程、この要件を満たす授業づくりの手法を「笠原型コンテンツ・ベイスト」と名付けました。

（同：2）。

ここに記された「この要件を満たす授業づくりの手法『笠原型コンテンツ・ベイスト』と名付けました」により、「笠原型」の定義はここで確認できる。これによると、「笠原型コンテンツ・ベイスト」とは、次の4つの「要件（2内容、1活動、1指導過程）」を満たすものであることがわかった。

＜コンテンツ・ベイストの授業の要件＞

- (1) 児童にとって驚きや発見を生む内容・・・・（内容）
- (2) 教科等の学習内容と関連付けた内容・・・・（内容）
- (3) 「聞く・話す必然」のある問題解決的な活動・・・・（活動）
- (4) 3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程・・・（指導過程）

このように、笠原型コンテンツ・ベイストとは、「児童にとって驚きや発見を生む内容」「教科等の学習内容と関連付けた内容」「聞く・話す必然のある問題解決的な活動」「3ステップで無理なく慣れ親しむ指導過程」の4つの要件を含んだ英語教育ということになる。

4.4 「単元の指導過程」についての研究

単元指導過程は、3つの段階に分かれている。1つ目は、「出会いの導入」であり、単元の英語表現と出会い、終末活動へ見通しを持たせることがねらいである。2つ目は「慣れ親しみの中盤」で、英語表現にスモールステップで慣れ親しませ、目指すコミュニケーションの態度を児童自身にイメージさせることを行う。3つ目は「活用する終末」で、問題解決的な活動を通して、学んだ表現を用いて、実際に伝え合うことの喜びや、コミュニケーションの態度の高まりを実感させるようとする。また、終末の活動形式は6つのカテゴリー (① Dialogue ② Play and Tell ③ interview ④ Show and Tell ⑤ Discussion ⑥ Speech1) に分かれ、指導計画にも位置付けている。

4.5 笠原型コンテンツ・ベイストに基づく「単元指導計画」の作成

笠原小学校(2011)の「外国語活動 指導計画集」から、笠原型コンテンツ・ベイストが単元指導の中でどのように計画されているのかを見てみたい。2年生の単元指導計画では、次のような単元で英語に触れる(表4)。

表4 小学校第2学年の単元計画

	<u>単元名</u>	主な学習内容
4月	<u>ともだちのことをしりたいな</u> 学級活動	友達に気分や好きなものを聞く活動を通して、Do you like... Yes, I do.等の表現に慣れ親しむ。
5月	<u>いくつかな?</u> 算数	手でつかんだ物の数を数える活動を通して、How many や、30までの数の英語表現に慣れ親しむ。
6月	<u>はにいいものなあに?</u> 学級活動	歯によいものよくないものを考え分ける活動を通じ、Is it good for our teeth or not good for our teeth? の表現や食べ物や飲み物の語彙に慣れ親しむ。
7・9 月	<u>くらべてみよう</u> 算数	2つのうちどちらが大きいか長い比べ会う活動を通して、Which is longer, A or B?の表現に慣れ親しむ。
10・ 11月	<u>水にいれると・・・?</u> 生 活	身の回りの物や野菜が水に浮くか沈むか確かめることを通して、野菜の名前やWhat's going to happen? It's going to sink.の表現に慣れ親しむ。
11月	<u>知っている?海の生き物 のふしぎ</u> 図工・国語・生 活	海の生き物の体のつくりを知る活動を通して、How many eyes can you find? Can you fine the eyes? や、海の生き物の表現に慣れ親しむ。
12月	<u>クリスマスツリーをつく ろう</u> 図工	クリスマスツリーを作ったりする活動を通して、クリスマス飾りの表現やWhat do you want? I want (a stocking.)の表現に慣れ親しむ。
1月	<u>どうぶつのふしぎなせか いを知ろう</u> 生活・体 育	動物の動きを表現する活動を通して、動物の名前やCan you do it?等、動物の動作の表現に慣れ親しむ
2・3 月	<u>すごろくにチャレンジ</u> 生活	2年生で学習した内容を振り返る双六ゲームを通して、Roll the dice. Go a head. 等の表現に慣れ親しむ

まず、笠原型コンテンツ・ベイストの1つ目の要件である「児童にとって驚きや発見を生む内容」であるが、小学校2年生の11月の単元に「知っている?海の生きもののふしぎ」(全4時)がある。その第2時では、ALTが写真を見て、「The rocks are so beautiful.」という。するとHRTが、「No. These are not rocks. Can you find an octopus? This is an octopus. This is the eye. This is the body.」

と言う。HRT と ALT は、岩の色にカモフラージュしたタコの写真を見ながら対話するのである。すでにこの段階で、児童は驚きと発見、興味を示す。そして児童は、写真の他の場所から海の生き物を見つけようとする。タツノオトシゴ、オコゼ、カサゴがカモフラージュしている。また、シャチの写真を見せ、Can you find the nose?と、体の部分がどこにあるのか尋ねる。第3時では、エイの口がどこにあるのか、タコに口はいくつあるのか等、児童にとって驚きや発見を生む内容（コンテンツ）をメインに授業は展開していく。このように、児童にとって驚きや発見を導き出すような「内容」を取り上げているのが、笠原型コンテンツ・ベイストの特徴である。

2つ目の「教科等の学習内容と関連付けた内容」では、前述の2年生「知っている？海の生きもののふしげ」の单元では、国語と生活、そして校外学習で水族館に行っていることから学校行事との関連が考えられる。国語との関連というのは、英語でタツノオトシゴは seahorse と言ったり、カレイやヒラメは flat fish、クラゲは jelly fish、オコゼは stone fish と言ったりするように、複合語になっている単語に気付かせ、単語の成り立ちの面白さに気付かせるようになっている。これをもし高学年であれば、イルカを海豚と書き、フグは河豚、サンマは秋刀魚のように漢字でも表されることを知つたりすることができる。よって、ここから国語との関連が見られるのである。生活科については、海の生き物ということで、教科内容になっている。

3つ目の、「『聞く・話す必然』のある問題解決的な活動」では、カモフラージュした海の生き物の写真を見ながら、「生き物が見えますか」と尋ねたり、「あっ。ここにタコがいる」と発見したことを相手に伝えたりすることは、発話に必然性が感じられる。しかし、これがもし普通に生き物が映っている写真を見せられ、「生き物が見えますか」と言われても、見ればわかるので、コミュニケーションとしては不自然である。今回のように、生き物がいるかいないかわからない状態で尋ねるからこそ、児童は真剣になり、先生の話を聞こうとしたり、発見したことを伝えたりする。さらに、シャチの写真を見せ、「鼻はどこにあるの？」と尋ね、I think the nose is here. とか、I think it's here. のように考えを発表していき、最後に、潮を吹くところが鼻であると確認して終わる。このように、本当に児童が知らないことを尋ねたり、話してあげたりすることで、児童にとって、聞く必然性、話す必然性が得られるように、授業内容を考えていることがわかる。

最後の4つ目は、「3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程」である。これは、指導過程を、①Greetings, Song ②Activities ③Comments の3段階としている。3段階にすることで Activities の中身が、常に言語活動を通じて学習内容に触れることになる。以前あった Practice の段階は、必要に応じ、Activities の中で行うという形と推測する。児童は、内容を与えられ、その内容についての問答を繰り返す（言語活動）ことで、英語で聞いたり話したりする力を身に付けていくと思われる。

このように、单元指導計画を詳細に見ていくと、児童の実態を踏まえ、児童の興味関心を持つ題材を上手に選択していることがわかる。

4.6 「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」を用いた成果と課題

笠原小学校では、成果と課題をデータで検証するために、国立教育政策研究所が実施した調査（小学校における英語教育の在り方に関する調査研究）を用い、全国の数値と比較している。以下が結果である（表5）。

表5 国立教育政策研究所調査研究を用いた比較（数値は正答率）

内容	全国	笠原小	比較
聞き取りクイズ	83.4	90.3	+6.9
アルファベットクイズ	83.7	81.5	-2.2
スピーリング調査	79.6	82.7	+3.1

平成 20 (2008) 年度実施の聞き取りクイズでは、「基本的語彙の理解を問う問題」や、「複数の語彙理解」「基本的動詞の理解」「教室英語の理解」「対話文の内容理解」「日常会話の理解」「まとめた文の概要理解」「質問の意図の理解」が調査されている。

基本的語彙の理解を問う問題では、図 1 のように、言われたものを 4 枚の絵の中から選ぶ問題である。ここでは、Horse.と放送される。

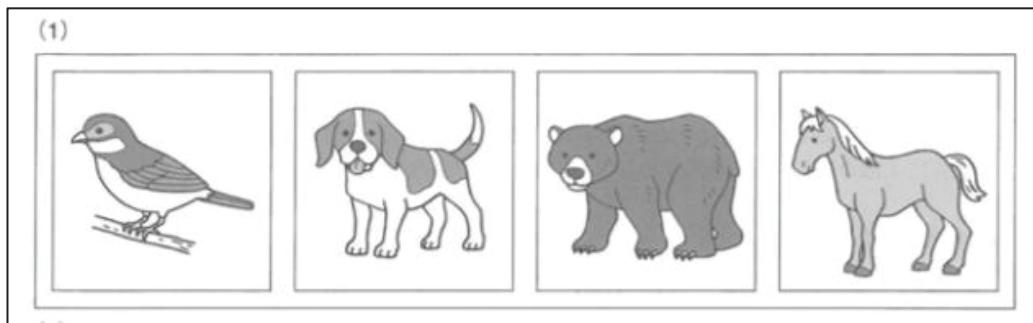


図 1 国立教育政策研究所 (2009) 聞き取りクイズ「基本的な語彙理解」

複数の語彙理解では、1.A lion and a monkey. 2 A monkey and an elephant. 3. A lion and an elephant.が放送され、その中から 1 つ適切な発話を選ぶという形式である (図 2)。

2. 今から英語を 3 種類言います。絵に合っている英語はどれですか。絵に合っている英語の番号を○で囲みましょう。

(4)

英語の番号		
1	2	3

図 2 国立教育政策研究所 (2009) 聞き取りクイズ「複数の語彙理解」

「アルファベットクイズ」は大問が 5 つあり、「聞いたアルファベットの大文字を書くもの」「聞いたアルファベットの小文字を書くもの」「アルファベットの読み方を聞いて、どの文字かを選択するもの」「ローマ字で指定された名前を書くもの」「指定されたアルファベットの大文字に合う小文字を選択するもの」となっている。

「アルファベットの読み方を聞いて、どの文字かを選択するもの」とは、放送される文字を選ぶ形式になる。例えば、「H」と放送されたら、H という文字を選択肢の中から見つけ、それを○する形式である。最後の「指定されたアルファベットの大文字に合う小文字を選択するもの」は、大文字に対する小文字を選ぶ問題である (図 3)

問題5. 次のアルファベットの大文字と同じ小文字を、右から選んで○でかこみましょう。

(1)

B**d****a****g****b****q**

図3 国立教育政策研究所（2009） アルファベットクイズ

「スピーキング調査（スピーキング・クイズ）」は、英語で発せられた質問に対し、児童がどの程度適切に返答できるかを把握するものである。質問内容は、「挨拶」「年齢」「誕生日」「天気」「時刻」「色」「動物（と色と数）」「食べ物」「スポーツ」「教科」「買物・数字」「楽器」「職業、将来の夢」について問うものとなっている。

例えば、When is your birthday? や What animal do you like? 、Can you play the piano? と尋ねられて、どの程度適切に応答できるか、また、絵を見て、Look at this picture. Is Megumi playing the guitar? に答えるといった内容となっている。

これらの問題に対して、笠原小学校では、「聞き取りクイズ」や「スピーキング調査」の数値が全国に比べ高くなっていることの分析として、低学年から音声を媒介とした多様なコミュニケーション活動を行っており、様々な言語材料に慣れ親しみ、積極的なコミュニケーションの態度を育んできた成果であることとしている。また、「アルファベットクイズ」においては、全国よりも低くなっていることから、文字を読んだり、書いたりする指導について、ほとんど実施してこなかったことを原因にあげている。

5 考察

5.1 笠原型コンテンツ・ペイストの定義

第3期の研究での一番の大きな成果は、「笠原型コンテンツ・ペイスト」の定義がしっかりとなされたということはないだろうか。今までには、コンテンツ・ペイストの「条件」という表現で、コンテンツ・ペイスト授業を組み立てる際の必要事項の検討を繰り返していた。英語活動の実践と児童の実態・評価とを行き来させながら、コンテンツ・ペイスト型の英語活動はどのようにしたらよいのかということについて、研究を深めていたことと推察される。第1期より、コンテンツ・ペイストの手法を検討してはいたが、第3期に資料により、初めて「笠原型」と呼ばれるコンテンツ・ペイストの定義が明らかとなったのは、研究への自信が感じられる。

5.2 外部テストの活用と課題の把握

客観的な評価を用いて研究の成果を評価し、課題につなげていることも特筆すべき成果と言える。国立教育政策研究所（2009）の「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」における調査を用いて全国と比較している。また、その結果において、「聞く・話す」については、笠原小学校の取組に一定の成果が確認されたが、一方、指導に力を入れてこなかった文字を読んだり、文字を書いたりすることについては、全国と比較すると下回っている事実となった。このことは、笠原小学校において、内容を重視した「聞く・話す」を中心として指導に重点をおいていたからであり、文字や読み書き指導については行ってこなかったことが要因であると記し、これについては、第4期の研究に引き継がれることとなる。

第3期については、分析資料が少なく、本来は他に研究推進が行われたこともあると推察するが、限られた資料からの分析であり、研究の全てを取り上げることはできていないことと推測する。

6 おわりに

笠原小学校の研究を第1期から第3期まで整理してきた。整理したといつても、まだまだ個別課題については、整理し尽くせていない。整理尽くしていない分野として、笠原小学校が英語活動に組み込んだ「内容」の整理である。これについては、また別のところで整理したいと考えている。今後は、コンテンツ・ベイストということから、どんな内容を、どの学年、どの時期に扱うのか、またその内容を問題解決的な学習として、どのように指導しているのか、その「内容」と「方法」についての研究及び整理・分析を進めていきたい。

参考文献

- 国立教育政策研究所（2009）。「平成20年度小学校における英語教育の在り方に関する調査研究 成果報告書」https://www.nier.go.jp/shoei_h20/shoei.html
- 文部科学省（2002）。「『英語が使える日本人』の育成ための戦略構想」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm
- 文部科学省（2003）。「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf
- 文部科学省（2020a）。「令和元年度『英語教育実施状況調査』の結果と今後の取組について」
https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_1.pdf
- 文部科学省（2020b）。「令和元年度『英語教育実施状況調査』概要」
https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf
- (以上 令和2年12月16日アクセス)
- 多治見市立笠原小学校・多治見市立笠原中学校（2007）。「平成18年度研究開発実施報告書第1年次」
- 多治見市立笠原小学校・多治見市立笠原中学校（2009）。「平成20年度研究開発実施報告書（H18年度～H20年度研究のまとめ）」
- 多治見市立笠原小学校（2011）。「外国語活動 指導計画集」
- 多治見市立笠原小学校（2012）。「文科省発表原稿」
- 瀧沢広人（2020a）。「笠原小学校の英語教育の歩み（1）第1期（2003年度～2005年度）の研究から－コンテンツ・ベイストの手法による授業改善－」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第69巻』第1号, 61-70.
- 瀧沢広人（2020b）。「笠原小学校の英語教育の歩み（2）第2期（2006年度～2008年度）の研究から－笠原型コンテンツ・ベイストの確立－」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第69巻』第1号, 71-80.